



官僚に論語のススメ

人事院がこの春、実施する課長級対象の公務員研修で、加地伸行・大阪大名誉教授(中国哲学)を講師に迎え、古典の中の古典「論語」の研究を行うことになった。疑惑や不祥事の相次ぐ外務省をはじめ霞が関の官僚に孔子の教えを聞く耳があるかどうか?

【鈴木琢磨】



加地伸行
名誉教授



■いまこそ役人として

して取り上げられる。従

「論語」の研究は、人 来は各界専門家や学者から公務員倫理一般について話を聞くなど試行錯誤ら4泊5日の日程で行われてきた。「人間性を磨ける公務員研修の一環と

英知が凝縮した古典を読み、考えてもらいたかった(根本康王・公務員研修所教務部長)

定員は30人。各省庁の課長級約20人、官民交流の観点から民間からも約

10人が加わる。研修メニューは政策課題の研究が中心だが、古典研究もたっぷり3時間かける。加地さんの「論語」と、大阪大学教授で哲学者の鷺田清一さんの「ソクラテスの弁明」の2コースある。

■論語は思索の宝庫

それにしても古代から日本の政治家、官僚に影響を与えてきた「論語」

が、21世紀に新たな出番で、加地先生に、うかがえるとは孔子も苦笑に贈る、とっておきの「論語」の一節は――。

△子曰く、奢れば則ち不遜、儉なれば則ち固なり。其の不遜ならんよりはむしろ固なれ。

「ぜいたくをすると傲慢になる。みみっちいとかたくなになる。どちらもよくないが、傲慢よりはみみっちいほうがましだ」という意味です。ぜいたくさんまの外務省なら、融通がきかなくてもいい。もっとまじめにやってくれと言いたいね」

春の研修で採用

「奢れば不遜」訴え